小学校の歴史既習事項を生かしたAL①
―聖武天皇と大仏造立―

兵庫教育大学　教授　山内 敏男

1 はじめに

１学期が始まり、中学１年生は小学校と異なる授業にとまどうことが少なくないでしょう。中学校と小学校では歴史学習の目標・内容が異なり、小学校では大まかな歴史と関連する先人の業績、優れた文化遺産の理解が目指されているのに対し、中学校では「歴史的な見方・考え方のとらえ方と調べ方」を学習するとともに、「歴史的な見方・考え方を働かせてそれぞれの時代の特色をとらえ」る学習が展開されることになります（『社会科 中学生の歴史』、以下教科書、p.13）。しかし、こうした違いを強調しては、学習への忌避感が生じてしまうかもしれません。まずは小学校の既習事項を生かすと同時に中学校の学習に「慣れ」ていくことが求められます。今回は、小学校で学んだ聖武天皇の事績を例に、既習事項を生かして時代の特色、大観までを含めた学習の提案をします。

2 授業の構成・展開

小学校では国づくりには聖武天皇のどのような願いが込められていたかなどの問いが設定され、大仏造立に込められた聖武天皇の願いや造立の様子を調べ、天皇を中心とした政治が確立されたことへの理解が目指されています。一方、中学校では社会の状況（伝染病の流行などの社会不安）や社会のしくみ（政治、宗教、国際関係）がどう関連していたのかを学習し、時代の特色を明らかにするところに違いがあります。「既有知識には個人差がある」ことをふまえて既習事項を想起させることが必要です。

【活動１】既習事項を想起する

想起させる際、何をどこまで知っているかの個人差を軽減する手立てとして聖武天皇に関わる「ウェビングマップづくり」を取り入れます。まず、「聖武天皇について知っていることは何か」を問います。イメージをグループで出し合うことで既習事項の共有が促され、同時に授業者が学習状況を把握することや年度当初における生徒同士の人間関係づくりが期待できます。

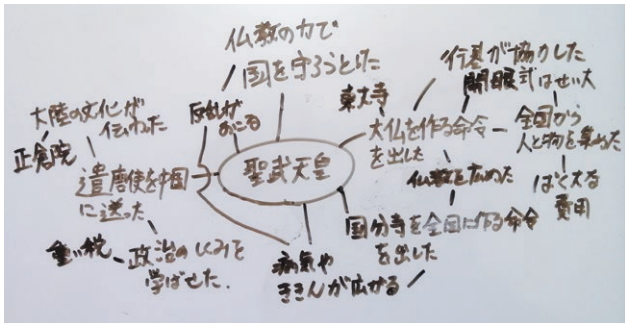

図　ウェビングマップの例

次に、ウェビングマップの記述を聖武天皇の行為と置かれていた状況に分けてまとめます。

ウェビングマップへの記述が想定される主な内容
○聖武天皇が行ったこと（行為）
- 唐の政治の仕組みを取り入れた
- 遣唐使を派遣した
- 唐から鑑真を招いた
- 大仏の造立を命じた
- 国分寺を建てることを命じた
- 仏教の力で社会の不安をしずめ、国を治めようとした

○聖武天皇の時代に起きたこと（状況）
- 病気（伝染病）によって多くの人が亡くなった
- 全国各地で災害や（貴族の）反乱が起こった
- 大仏づくりにはばく大な費用がかかった
- 大量の物資と大勢の農民を全国から集めさせた
- 大陸の文化が伝わった

（小学校社会科教科書全３冊より一部要約・抜粋）

ここから個別の行為、状況で「関連づけられることは何か」を問い、発展させた出来事を収束させていきます。例えば「大仏の造立を命じた」ことに対して「仏教の力で社会の不安をしずめ、

国を治めようとした」との関係は行為と意図となり、「国分寺を建てることを命じた」ことは類似の行為として関連づけることができます。

関連づけにはさまざまな組み合わせが想定されます。ここで促したい発言は関連づけた理由や根拠です。関連づけることができるのはなぜなのかを問い、理由や根拠を明確にします。そして、生徒たちが想起した内容から問いを生成する、つまり既習事項を問い直すことが、主体的な活動を促すことになります。次の活動ではこのまとめから「なぜ」の問いを生成します。

【活動２】「なぜ」の問いを繰り返し生成する

行為や状況に関する「なぜ」の問い、例えば最初の問い「なぜ、大仏の造立を命じたのか」に対して、「仏教の力で社会の不安をしずめ、国を治めようとした」からと答えるのは一見理にかなっています。しかし「なぜ、仏教の力を借りようとしたのか」についてはまだ明らかではありません。このように「なぜ」の問いはたやすく解決できず、答えが一つとは限らないという点で難しさがあります。**活動２**ではこの点に留意させ「なぜ」の問いを生徒が繰り返し生成して、人物の行為や社会のしくみとの関連を探究します。今回は「なぜ、大仏の造立を命じたのか」から始まる問いを例に、聖武天皇による政治の正統性にかかわる資料「大仏造立の詔（みことのり）」の読み取りから問いを繰り返し、解いていきます。

資料「大仏造立の詔」

私（聖武天皇）は徳の薄い身でありながら、天皇の位を受け継いだ。（中略）思いやりと恩恵を国の隅々まで届くようにしたいが、今この国を見ると、十分であるとは思えない。

私は仏法僧（仏教）の威光と霊力に頼って、天地ともに不安や危険がなく、後の世までの幸せを願う事業を行って、動植物がことごとく栄えることを望むものである。（後略）

（『続日本紀』天平15（743）年10月15日より一部要約・抜粋）

問い２では「なぜ、病気が発生したのか」を問いたいところです（蔓延した病気は天然痘とされ、遣唐使が持ち込んだという説があります）。しかし、ここでは資料にある「徳の薄い身」に着目させ、代々政治を執り行ってきた天皇としての立場から大仏造立を考えるよう指示し、社会のしくみを問う問いの生成を促します（他の視点から問いを生成してもよいでしょう）。このように「なぜ」を繰り返し問い、置かれていた状況や社会のしくみに規定された要因を導き出すことにこの活動の意味があります。

「なぜ」の問いと答えの例（大仏造立から始まる問いの場合）

問い１　「なぜ、大仏の造立を命じたのか」
答え　「病気によって多くの人が亡くなったから」
問い２　「なぜ、多くの人が亡くなると大仏を造立するのか」
答え　「仏教の威光と霊力に頼って国を栄えさせようとしたから」
問い３　「なぜ、仏教の威光と霊力に頼ったのか」
答え　「自分（聖武天皇）は徳が薄くて病気や災害が起こったから」
問い４　「なぜ、徳が薄いと病気や災害が起こると考えたのか」
答え　「天皇の徳（人格や能力）がよくなければよい政治ができないと考えられていたから」

【活動３】時代の特色を導き出す

ここで教科書p.45～47にかけての記述から、状況に関わる社会のしくみをとらえていきます。聖武天皇は政治の力や古くからの神への信仰（教科書p.33、46を参照）だけでは災いを防げないと考えたことから、仏教の力で国を守り、不安を取り除こうとした思想（鎮護国家（ちんごこっか））に基づいた社会のしくみに変化していったことが理解できるでしょう。以前のしくみ（天皇の徳や政治の力、古くからの神への信仰）と比較することで、「仏教をよりどころにして政治を行った時代」であったという特色が導き出せます。

3 おわりに

既習事項を想起させ、社会の状況と人々の行為を問いによりとらえ直すことで、時代の特色が導き出せます。「歴史的な見方・考え方のとらえ方」を少しずつ身に付けることにもつながります。単元のまとめでは、政治、産業、社会、文化それぞれのしくみや特色（政治でいえば古い信仰や仏教と政治との関係、班田収授法、墾田永年私財法、都の建設など）について、唐のしくみと比較させることで、日本独特の「律令政治」であったことが大観できるでしょう。